

長), 植田睦之, 亀田佳代子, 川上和人 (基金運営委員長), 齋藤武馬 (鳥類分類委員長), 嶋田哲郎, 高木昌興, 永田尚志, 西海 功 (目録編集委員長), 濱尾章二 (図書管理委員), 早矢仕有子, 森 さやか (広報委員長), 山口典之

欠席評議員: 日野輝明 (委任状提出)

各種委員会代表等: 水田 拓 (英文誌編集委員長), 藤田 剛 (和文誌編集委員長), 武石全慈 (鳥類保護委員会副委員長), 金井 裕 (日本産鳥類記録委員会副委員長), 牛山克巳 (企画委員長), 浦 達也 (選挙管理委員長)

事務局: 浅井芝樹 (事務局長), 片山直樹 (会計幹事), 山口恭弘 (庶務幹事)

監事: 加藤ゆき

2022 年度大会実行委員会: 白木彩子 (大会会長)

オブザーバー: 風間健太郎, 松井 晋, 三上 修

報告・審議事項

- 1) 各種委員会報告 (報告内容については委員会報告を参照)
- 2) 事務局関係報告
 - a) 選挙結果報告 (報告内容については選挙結果報告を参照)
 - b) 会員動向 (会員動向報告を参照)
 - c) 2020 年度決算報告 (和文誌 69 巻 2 号に掲載)
 - d) 2021 年度会計予算の執行状況の報告
- 3) 審議事項
 - a) 次期各種委員会体制に関する審議
和文誌編集委員会で亀田佳代子が退任し, 森口紗千子, 田仲謙介が就任. 英文誌編集委員会で田中啓太が退任し, 中原 亨が就任. 日本産鳥類記録委員会で西沢文吾, 梅垣佑介が就任 (2021.9.1 より). 鳥類分類委員会で平田和彦が就任 (2021.9.1 より). 広報委員会で天野達也が退任. 基金運営委員会で山口典之, 藤田 剛, 布野隆之, 森貴久, 西海 功, 山崎剛史が退任し, 一方井祐子, 堀江明香, 熊田那央, 江田真毅が就任. 目録編集委員会で平田和彦, 西沢文吾, 梅垣佑介が就任 (2021.9.1 より).
 - b) 2022 年度予算案
2022 年度予算案が諮られ, 承認された.
 - c) 2022 年度大会開催地
評議員会で白木大会会長より挨拶がなされ

日本鳥学会 2021 年度評議員会報告

日 時: 2021 年 8 月 31 日 (火) 14:00-17:30

場 所: オンライン

出席評議員: 尾崎清明 (会長), 綿貫 豊 (副会

- た。
- d) 2023 年度大会開催候補地
2023 年度大会開催候補地（石川県立大学）
について審議，承認された。
- e) 要望書の総会決議について
（仮称）苫東厚真風力発電事業に対する事業
中止要望書の総会決議について承認された。
- f) 感謝状の贈呈
岡田泰明氏より 100 万円の寄付があり，感
謝状を贈呈することについて審議，承認さ
れた。
- g) 規約改定
Ornithological Science 投稿規定，日本鳥学会
広報委員会規定，日本鳥学会大会規定の改
定について審議，承認された。

日本鳥学会 2022 年度評議員会報告

日 時：2021 年 8 月 31 日（火）17:30–18:00

場 所：オンライン

2021 年度評議員会に引き続き実施された。

新会長挨拶の後，副会長の互選が行われ，副会
長に嶋田哲郎氏が選ばれた。また，新会長から次
期事務局体制が提案され，承認された。

<次期事務局体制>

会長：綿貫 豊

副会長：嶋田哲郎

事務局長：松井 晋

会計幹事：片山直樹

庶務幹事：風間健太郎

監事：秋山幸也，森口紗千子

日本鳥学会 2021 年度総会議事報告

2021 年 9 月 9 日（木）–10 月 13 日（水）決議：
郵送または電子メール

- 1) 事務局関係報告（評議員会報告を参照）
- 2) 評議員会報告（評議員会報告を参照）
- 3) 各種委員会報告（各種委員会報告を参照）
- 4) 選挙結果報告（選挙結果報告を参照）
- 5) 次期会長挨拶，次期事務局体制（2022 年度評
議員会報告を参照）
- 6) 2022 年度大会について
以下の議事が審議され，10 月 22 日付で承認
された。

- 1) 2020 年度会計決算／監査報告
- 2) 2022 年度予算案
- 3) 要望書提出
- 4) Ornithological Science 投稿規定改定

- 5) 日本鳥学会広報委員会規定改定
- 6) 日本鳥学会大会規定改定

和文誌編集委員会報告

1) 発行状況

70 巻 1 号を 2021 年 4 月，70 巻 2 号を 2021 年
10 月に発行した。Editor's Choice「注目論文」は
それぞれ，藤井忠志さんの「クマゲラの生態と本
州における研究小史」と山路公紀さん他の「八ヶ
岳周辺と高山市におけるジョウビタキ *Phoenicurus
auroreus* の繁殖環境の選好性」に決まった。

1 号（4 月） 総説 1，原著 2，短報 1，観
察記録 3

2 号（10 月） 原著 6，短報 1，観察記録 4

2) 投稿・編集状況

今年度の編集状況（12 月 31 日現在）は，下表
のとおりである。通常の投稿原稿数は順調である。
2019 年度大会シンポジウムの特集 4 編と黒田賞総
説 4 編，モノグラフ 1 編が，投稿予定である。

	総説	原著	短報	技術報告	観察記録
繰越し	1	7	7	1	5
投稿	0	10	3	0	10
受付	0	10	3	0	10
受理	1	5	3	1	9
編集中	0	10	7	0	6
不受理	0	2	0	0	0

3) J-stage 搭載電子版のアクセス

J-stage における過去 1 年間（2020 年 1 月–2020
年 12 月）の和文誌掲載論文（2006 年第 55 巻
–2020 年第 69 巻）に対する全文 PDF アクセス数
（クローラー除く）は，昨年（66,666 件）の約 1.38
倍にあたる 92,278 件だった。国別内訳は昨年同
様，日本が多数を占め（70,837 件；76.8%），アメ
リカがこれにつぎ（13,568 件；14.7%），他の国は
わずかとなった。ダウンロード数上位 20 報の種別
を見ると，総説が 14 報（70%；黒田賞受賞論文 1
報・モノグラフ 2 報を含む），原著論文が 5 報
（25%），短報が 1 報（5%）だった。

（和文誌編集委員長）

英文誌編集委員会報告

1) 発行状況

第 20 巻 1 号（原著 8 編，総説 1 編，短報 3 編）
を 2021 年 1 月に，2 号（原著 8 編，総説 1 編，短
報 5 編）を 7 月に発行した。Editor's Choice はそ

れぞれ D. Iijima 氏と G. Morimoto 氏による高山帯における鳥類群集に関する論文と、S. Nakatsuka 氏らによるアホウドリ類の食性とプラスチック摂取に関する論文とした。

2) 編集状況

2020年1月-12月(2021/1/6現在)

総投稿数 44(前年比0.86倍)

受理数 9 採択率 37.5% [受理数/(総投稿数-審査中数-取り下げ数)]

審査中 20

取り下げ 0

却下数 15(うち編集委員会却下数 11)

前年に比べ投稿数は少し減少したが、投稿はされたものの体裁が整っていないためまだ受け付けていない論文が4編あり、総投稿数は前年と大きく異なる。査読まで回らず編集委員会内の審査で却下された論文が全却下論文の7割以上を占めており、投稿数の増加だけではなく投稿論文の質の底上げが引き続き重要な課題である。

3) その他

2020年の電子版アクセス状況は、資料トップへは昨年比4%減の4,943件、全文PDFへは1.3倍増の23,070件であった。2020年のインパクトファクターは0.886(Ornithologyカテゴリ28誌中18位)で、昨年に比べ微増、順位も19位から上昇したが、大きな変化ではなく引き続き注視が必要である。

(英文誌編集委員長)

鳥類保護委員会報告

1) (仮称) 苫東厚真風力発電事業に対する意見書の提出及び総会決議要望書の採択と提出

2020年5月、北海道厚真町および苫小牧市での標記事業の配慮書が公開され、鳥学会員から意見書提出の要望があり協議した。この地域における鳥類の生息状況及び生息地の保全状況について精査した結果、計画地周辺での生息状況がある程度把握されている希少鳥類種のうち、特に大きな影響が危惧されるものとして、タンチョウ、チュウヒ、オジロワシ、オオワシ、マガン、ヒシクイ、シジュウカラガン、オオジシギなどが考えられた。この点を考慮して、委員会で意見を取りまとめた上で、2020年11月1日付で、事業者にも含めて全面的に再考するよう鳥類保護委員長名の意見書を送付した。2021年3月に事業者と鳥類保護委員会との間で意見交換が行なわれたが、希少種等への懸念は払拭されないことから、改めて口頭

で中止が妥当であるとの考えを表明した。その後、事業者からは中止も含め事業計画再考の動きがなかったことから、2021年4月に前出の鳥学会員を含む4名の鳥学会員から、改めて事業中止を求める会長名発出の要望書案の提案を受けた。これを受けて鳥類保護委員会及び提案者で協議し、鳥類保全上重要な案件と判断されたので、総会決議として会長名での要望書を採択することを提案し可決された。2021年11月25日付で事業者にも要望書を送付するとともに、関係官庁および自治体へその写しを送付し、同年12月16日に苫小牧市政記者クラブにおいて日本野鳥の会本部、同苫小牧支部、ネイチャー研究会 in むかわと共同で記者発表を行なった。

2) 自然再生エネルギー関連施設計画に特化したチームの設置の検討

2021年6月に、評議員会の了解のもと、綿貫副会長から、自然再生エネルギー関連施設計画に特化したチームを鳥類保護委員会内に設置してはどうかとの提案があった。チームの立ち上げを行なうことを可と考へ、具体的な体制について検討が行なわれた。

(鳥類保護委員長)

日本産鳥類記録委員会報告

1) 目録第7版の記述事項に関する質問への対応

目録第7版の記述のうち、各地の生息記録に関する一般、もしくは他委員会からの質問に答えるための文献資料等の確認作業を行った。

2) 目録の記載変更根拠資料の整理

目録6版から7版への記載変更の根拠文献や情報の確認を行い、資料として整理する作業を実行中である。

3) 日本産鳥類の記録文献収集および整理

稀種の記録、各地鳥類相、標本目録等の記述が掲載されている、日本産鳥類の記録に関する文献の収集と整理を行った。これらは今まで同様、ある程度まとまりがついたところで、随時和文誌上に公表していく予定である。

4) 日本産鳥類の記録収集と整理

未だ文献化されていない日本産鳥類の記録(インターネット上に公表された記録、個人的伝聞による記録など)についての情報の収集と整理を行った。

5) 日本産鳥類の記録に関する文献作成への協力

当委員会の委員を通して要請があった場合に限り、目録、報告書、論文の作成時に過去の記

録などが明らかでない場合に、その探索と提供を行った。

6) 目録第8版編集について

目録第8版の編集について、記録委員会委員は目録編集委員として各地の記録収集と整理にあたった。

7) 目録8版発行後の新記録種の確認体制について

新聞、雑誌記事やWEB配信といった様々な媒体で新知見が公表される新記録種報告について、日本産鳥類記録委員会として文献化し記録確認を進めることの是非や体制について検討を行った。

(日本産鳥類記録委員長)

鳥類分類委員会報告

分類委員会では、メンバーの全員が目録編集委員会の委員を兼務している。そのため、日頃の分類委員会の活動に加え、目録編集作業のための作業を行っている。今年度は月に2回程度、1回につき約2時間の作業を計19回、オンライン会議を通じて行った。具体的な作業としては主に、次版第8版に掲載される種のリスト作成とその学名の検討である。また必要に応じて、掲載種の分類の見直しや分布域の確認、和名の検討なども行った。その他、目録第8版の印刷に関する方法の検討等を行った。

完成された目録第8版で掲載する種のリストについては、パブリックコメントの形で目録編集委員会が2021年2月18日から4月末まで公表し、会員に学会HPを介して広く意見を求めた。その際に出た意見について、分類に関する事に関しては、分類委員会で対応を検討した。

(鳥類分類委員長)

目録編集委員会報告

1) パブリックコメントについて

日本鳥類目録改訂第8版の2022年9月出版を目標にして、第1回パブリックコメントを行い、また第2回パブリックコメントを準備している。

○第一回パブリックコメント

2021年2月18日に、掲載種・亜種のリストを委員会ホームページ上に公表し、属以下の分類(和名、学名)、および新規掲載種、検討種について2021年4月末まで意見を求めた。18件の意見が寄せられ、たいへん有意義なものとなった。その結果と御礼および方針を9月10日に学会Webサイトに掲載した。

○第二回パブリックコメント

掲載種・亜種と地域記録の公表に向けて鋭意準備中である。

2) アホウドリの和名変更の要望書への対応

千葉県野鳥の会より尾崎会長宛に送られた要望書(2月20日付)への対応素案を3月に作成し、評議員会で審議いただいた。

3) 新任委員

平田和彦(分類委員兼任)、西沢文吾(記録委員兼任)、梅垣佑介(記録委員兼任)の3名を評議員会の承認の下、新任委員として2021年9月より補充した。

4) 第8版出版後の本委員会の常設化の提案

目録編集委員会は2018年9月に立ち上げられた臨時委員会で、委員の任期は出版予定年の2022年度末までとなっているが、2022年度の評議員会と総会で委員会の常設化を提案したいことを2021年評議員会で相談した。理由は、次版の編集準備を円滑に行うことと、年1回、目録リストの更新を補遺(supplement)として発表することを目指すため、常設化においては記録委員会と分類委員会との統合が検討課題としてあげられた。

5) 自由集会の開催

2019年に引き続き、2021年にも自由集会「みんなで作ろう!目録8版(その2)」を開催して、日本鳥類目録の意義と第8版に向けた改訂作業について会員に広報するとともに、会員との意見交換をおこなった。

(目録編集委員長)

企画委員会報告

1) 鳥の学校

日本鳥学会2021年大会にあわせて鳥の学校(第12回テーマ別講習会)「鳥類調査のための法律講座~知っておきたい基礎知識」を開催した。

2) 男女共同参画関連

第19回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム(2021年10月9日、オンライン)に委員が参加した。男女共同参画学協会連絡会定時総会と運営委員会に委員がオブザーバ参加した。

3) 日本鳥学会ポスター賞の実施

2021年度大会にあわせて第5回日本鳥学会ポスター賞を実施した。「①繁殖・生活史・個体群・群集」「②行動・進化・形態・生理」「③生態系管理/評価・保全・その他」の3部門に対して各1名の受賞者を選定し、公表した。

4) その他

2021 年度大会で設けられた Druid Award の選考に協力した。

(企画委員長)

広報委員会報告

1) ウェブサイトの修正、更新

事務局、各委員会などから、月に数回の変更の依頼が来ているが、ほぼ数日以内に処理できている。今後もこの速度を継続する。会員メニューの設置や委員会ページの様式変更など、事務局の依頼に応じて今年度は比較的大きなサイトデザインの変更や修正もおこなった。

2) 国立国会図書館のウェブサイトアーカイブへの登録

「国立国会図書館インターネット資料収集保全事業 (WARP)」からの要請に応じ、国立国会図書館による学会ウェブサイト (全ページ) のアーカイブの定期収集、保存、および利用者へのデータ提供を承諾した。管理責任者は広報委員長、連絡先は広報委員会のメールアドレスとした。

3) 広報委員会運営 SNS の運用状況

Facebook と Twitter で、鳥学通信の新規記事のリンク、大会事務局や学会事務局からのお知らせの一部を配信している。昨年の同時期と比較して、フォロワー数は Facebook ではおよそ 370 名増加して 2,139 名、Twitter では 2 倍以上増加して 2,394 名となった (2021 年 12 月 31 日現在)。フォロワーの年齢層は青少年から高齢者まで幅広く、職業も多様であるようだが、Facebook では 40 代後半以上の男性が多く、Twitter には学生などの若い世代のフォロワーが多いようである。

4) 2021 年度大会へのウェブサイトとメールアドレスの提供

大会実行委員会からの要請に基づき、大会ウェブサイト用のテンプレートとサーバースペース、大会事務局用メールアドレスを提供した。

5) 鳥学通信の発行

昨年度大会の中止によって大会関連記事が一報もなかったことから、2020 年 9 月 - 2021 年 8 月の記事投稿が 7 件しかなかった。しかし、毎日少なくとも 100 名超のユーザーの訪問がある。そこで概ね月 2 報の目標を達成すべく、ユーザーの関心の高い内容の掲載記事案を共有し、原稿依頼を分担して行う努力をし、2021 年 8 - 12 月は月 2 報以上の掲載を達成できている。掲載作業については、原稿受領後ほぼ数日以内に処理できているため、今後もこの速度を継続する。

6) 委員の退任・委員長の交代

広報委員を連続 8 期務められた天野達也氏が 2021 年末をもって退任した。委員長、副委員長の任期満了に伴い、2022 年からは委員長は上沖正欣氏、副委員長は長谷川 理氏に交代した。

委員会規定の改定を総会の審議事項として提案し、2021 年 10 月 22 日付で承認された。これにより連続再任は 5 期までと定められ、2 年間の移行期間の間に体制更新の準備を整えることとした。

(広報委員長)

基金運営委員会報告

1) 2021 年度学会賞

学会賞受賞候補者として黒田賞は片山直樹氏、中村司奨励賞は澤田 明氏および夏川遼生氏を選定し、評議員会で承認された。内田奨学賞は該当者がなかった。詳細は前号 (日本鳥学会誌 70 巻 2 号) で報告済み。

2) 2021 年度津戸基金助成

津戸基金によるシンポジウム開催助成を募集したが、応募がなかった。これは COVID-19 の影響により開催が減少しているためと考えられる。本助成は隔年で募集しているが、助成率が 50% に留まっていることを勧告し、2022 年度に再募集することとした。

3) 2022 年度伊藤基金助成

IOC2022 参加助成を募集したが、応募がなかった。これは COVID-19 の影響により参加に消極的になっているためと考えられた。

4) 2022 年度学会賞等

黒田賞、内田奨学賞、中村司奨励賞の募集を開始した。津戸基金によるシンポジウム開催助成の募集を開始した。

5) 寄付の報告 (岡田基金)

岡田泰明永年会員より、岡田基金として 100 万円の寄付をいただいた。ここに深く感謝の意を表したい。本基金については別途報告する。

(基金運営委員長)